「あすなろ」便り

No.105
2016.6
発行：あすなろ
TEL:046-254-2005

筑波大学大学院教授「斉藤　環氏」講演会

６月４日（日）神奈川県青少年センターにて、「社会的ひきこもりとは」をテーマに斉藤環氏の講演会がありました。その時の話のポイントをあげてみます。

社会的ひきこもりの定義は6か月以上社会参加しない。精神障害を第１の原因としない。支援者の第１は家族であり医者が全てではない。この時初期対話が大切であり、当事者の尊厳を尊重することであり、正論で説得しても駄目である。男性のひきこもりに世間の目が厳しいという事もあり男性のひきこもりが多い。しかし、親世代の高齢化で長期化した場合家族だけでは無理で第3者の支援が必要となる。
若者は何故働くのか？という問いには、旧世代は、食べる為であり、新世代は承認される為である。新世代は飢えを知らないためで就労したい気持ちにさせるには、衣・食・住を満たす事。
家族の基本的な心構えとしては、本人が安心してひきこもれる関係つくりが大切で、「怠け」「甘え」「わがまま」の言葉は禁句である。それには、本人との距離感を持って、”友達の子を預かっている”という気持ちでいることである。　普段の生活では、何気ない、たわいない、くだらない会話をする事であり、上から目線の言葉は効果なし

家庭内暴力への対処法としては、暴力は拒否して、距離をおくために避難することも大事である。でもそれは「あなたから逃げたのではない暴力から逃げた」という事を理解する。
しかし、親の高齢化と本人の高齢化が現実で、処遇困難の場合、ひきこもりのライフプランを考える事である。

この他、斉藤先生のお話は色々とありました。この講演に参加した者として「ひきこもり」について考えさせる示唆に富んだお話でした。